

中国の観光地を歩く

国際地域学部国際観光学科3年

南澤 雄基

私たち乗ゼミは、3、4年合わせて20人のゼミです。ゼミの雰囲気は明るく、メンバー間での意見交換が活発で結束力の強いゼミです。中国人の梁先生の勧めで、中国からの留学生も在籍しているため、ゼミそのものが生の文化交流の場となっています。

ゼミの研究テーマは「北東アジアの文化交流、観光交流」です。北東アジアとは日本、中国、韓国、北朝鮮、モンゴルおよびロシアの6カ国を指し、本年度は主に中国の文化や観光交流について研究しています。グループに分かれて中国の地域を取り上げ、民族や食文化、観光地についての情報を多く集め、それぞれが発表を行いました。

田園の学舎 まなびや 東洋大板倉キャンパス 発

～第3部 III

夏休み中の9月24日から26日までの6日間、観光地巡りと大學生との交流を目的に、北京と上海を訪問してきました。

教室でくらし勉強しても、私中国に対するイメージは、歴史は素晴らしいが、まだまだ発展途上と幼稚な国ではないというものでした。しかし、首都・北京の市街地に入ると、そこには高層ビルが立ち並び、しかもそれらのほとんどは築10年にも満たない現代のなごみばかり。道路は自動車が多すぎて渋滞している状態。町にはローソンやセブンイレブンなどのコンビニ、そしてスターバックスやサイゼリヤなど外資系の店が多い。急速な現代化を目の当たりにしました。

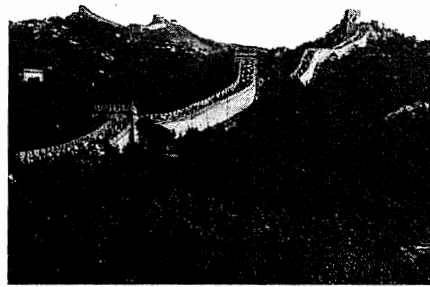


上海師範大学で記念撮影

イゼリヤなど外資系の店が多い。急速な現代化を目の当たりにしました。

観光資源の改善点知る

万里の長城
落書きの多さに心痛む



観光地としての良い面も悪い面も、肌で感じる事ができた万里の長城

語学科、上海復旦大学観光学科の学生たちと交流しました。お互いの国について紹介し合いましたが、師範大学の学生たちは日本語が流暢で、中国で人気のある日本の料理やアニメ、漫画、映画、アニメなどについて紹介してくれました(驚いたことに、学食のメニューに寿司が入っていました)。日本語を学んでいる理由を尋ねると、「日本の文化や歴史に興味がある」「将来日本に住みたい」などの答えが返ってきました。

復旦大学の学生とは、英語と中国語で学生生活について話し

くと、「在学中、家族にあまり会えないことは寂しいけれど、不自由はないし、家族のためにもしっかり学ばなければならぬから」と笑顔で話してくれたことが、印象的でした。

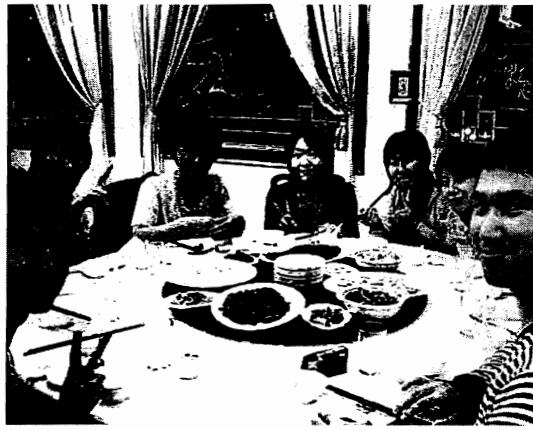
今回の訪問では、万里の長城のような優れた観光資源の改善点を知ることができました。これが今後の研究に役立つことはもちろんですが、現地で見ると、触れ合う、感じる事が、国際理解をさらに深める重要なことともあらためて感じました。

中国は2008年に北京オリンピックを、2010年には上海万国博覧会を控えています。そのためまらつきはもう始まっているようですが、接客態度やマナー、ゴミ問題など早急に対応すべき課題も数多く存在しています。今回は中国の一部を覗いただけにすぎませんが、これからも中国を訪れ、観光に関するまらつきや住民の意識について、より深く調べていきたいと思っています。

観光地として印象に残ったのは、やはり万里の長城です。北京から1時間ほどの郊外にあり、全長6000キロもあります。人工衛星からも確認できる世界遺産です。さすがに海外からの旅行者が多く、老若男女問わず登っていました。

しかし、これほど有名な世界遺産であるにもかかわらず、壁という壁に落書きがあつたことには心が痛みました。さらに観光客がいる、もつかるという理由で、売店以外の場所が執拗に物を売ろうとする人が多く、観光地なのかフリーマーケットなのか分からない状態です。ゼミ生の中には、定価の10倍の値段でものを買わされた人もいました。観光客に悪い印象を与えるこの状態を、一日も早く改善することが求められています。

上海では、上海師範大学日本



レストランで本場の中華を存分に味わう